



『和泉式部集』一〇七番歌詞書「蔵人の少将」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002584">https://doi.org/10.24729/00002584</a>

# 『和泉式部集』一〇七番歌詞書「蔵人の少将」をめぐって

青木 賜鶴子

## 一 はじめに

『和泉式部集』一〇七番歌から一一一番歌は、ある年の稲荷祭と賀茂祭見物での出来事を記している。一〇七番歌詞書に「公信の少将」(藤原公信)、「蔵人の少将」、一一〇番歌詞書に「たづ君」(藤原頼通の幼名)、一一一番歌詞書に「雅通の少将」(源雅通)とあり、頼通が幼名で呼ばれていること、公信と雅通が少将であることにより、およその詠歌年代が判明する。一〇七番歌詞書「蔵人の少将」については、公信の任少将以降頼通元服以前の「蔵人の少将」は公信一人であるとして、直前の「公信の少将」の注記と見るのが通説となっているが、別の解釈、すなわち本文に忠実に「公信の少将」「蔵人の少将」の二人とする解釈も可能であると思われる。以下、この歌群を読みときながら、「蔵人の少将」の再検証を試みたい。

『和泉式部集』一〇七番歌詞書「蔵人の少将」をめぐって

## 二 一〇七〜一〇九番歌

まず、一〇七番歌から一〇九番歌を掲出する。<sup>①</sup>

いなりまつりみしに、かたはらなる、くるしきさまのち  
まきなどとりいれて、「まろがくるまにとりいれし」と  
きむのぶの少将、くら人の少将いひけると聞しを、一日  
まつりみるとて車のまへをすぐる程に、ゆふかけてとり  
いれさせし

いなりにもいはると聞しなき事をけふはたゞすのかみにまか  
する(一〇七)

かへし

なにごとゝしらぬ人にはゆふだすきなにかたゞすの神にかく  
らん(一〇八)

といひたれば、みてぐらのやうにかみをして、かきてや

神かけてきみはあらがふたれかさはよるべにたまる水といひける（一〇九）

一〇七番歌詞書「かたはらなる、くるしきさまのちまきなどとりいれて」は、いま試みに読点を付してみた。「くるしきさまの」がわかりにくいのが、「苦しきさまに粽など取り入れて」であれば、傍らの車が見苦しいことに粽を取り入れて、と解せようか。村田春海本・岸本由豆流本には「かたはらなるくるまの、ちまきなどとりいれてくるしきを」とあり、意味は通りやすい。

稲荷祭は四月上卯の日とされる。「ちまき」は五二二番歌詞書にも「五月五日、ちまきを人のもとにやるとて」とあり、普通は端午の節句にちなむものだが、五月五日に限らず食されていたのだろう。粽を取り込むことについては、『和泉式部集全釈』<sup>③</sup>（以下『全釈』）が、

この時分の貴族、ことに女性のたしなみとして、人前で飲食するのを恥ぢる気風が強かった。（中略）それが、祭見物の人中で、粽を車の中に運ばせたといふのだから、人目もひいたし、和泉は、となりに見てみるだけでも何だかきまり悪かったので「苦しきを」と言ったもの。

と述べているように、空腹を他人に悟られることを嫌ったと思わ

れる。衆目の中で女車に食物を取り込んだら、さぞ目立ったことだろう。それを、「きむのぶの少将、くら人の少将」に、自分だと噂を立てられたというのである。

「きむのぶの少将」は藤原公信（九七七―一〇二六）で、太政大臣為光の六男、母は太政大臣伊尹の二女である。『枕草子』「五月の御精進のほど」の段に、ほととぎすの声を聞きに外出した清少納言たち一行に呼び出され、卯の花で飾った牛車を、袴の帯を結びながら走って追いかけた話は有名である。長徳四年（九九八）、公信二十二歳の頃で、「侍従殿」と呼ばれている。

公信は長徳元年（九九五）従五位下に叙せられて以降、讃岐介、侍従、右兵衛佐などを経て、長保元年（九九九）正月従五位上、閏三月少納言、九月右少将に任ぜられた。長保四年二月には五位藏人、翌五年正月従四位下に叙せられている（以上『公卿補任』）。寛弘元年（一〇〇四）二月五日に「中將公信」、十二月十六日に「右近中將公信」（以上『御堂閔白記』）と見えるので、長保元年（九九九）九月以降、寛弘元年（一〇〇四）二月以前が、「公信の少将」の時期ということになる。<sup>④</sup>

「くら人の少将」については後述する。

「まつり」は、四月中西の日に行なわれた賀茂祭で、稲荷祭からさほど経過していないだろう。無実の噂を立てられて心中穏

二二二〇・二二一番歌

やかでない中、ちょうど車の前を通り過ぎたので、「稲荷祭でも、ありもしないことを言われたと聞きましたが、今日こそは、糺の神に偽りを糺していただきましょう」（二〇七）と詠みかけたのである。「とりいれさせし」とあるので、相手も車に乗っていたことになる。

「木綿<sup>⑤</sup>」は、祭や祈願の時、櫛に掛けて神前に捧げた。「みごもりのかみなづきぞとおもはずはゆふかけつべき心地こそすれ」（続六三六）と、（片恋を諸恋にする）みごもりの神の月と思わなければ、木綿をかけてしまいそうだと詠んでいるように、「木綿<sup>⑤</sup>」は、木綿を掛けて祈願するのが本意である。ここは祭にちなんで歌に木綿を添えたのだから、神かけて釈明を求め、やや大げさな小道具ともいえる。

そして、「何のことか知らない無実の私に、どうして糺の神まで引き合いに出されるのか」（二〇八）ととほける相手に対して、今度は紙を幣帛のような形にして、「神様にかけて反論するのですね。ではいったい誰が見たと言ったのでしょうか」（二〇九）とやりこめる。「幣帛」もやはり神事で用いるものだから、わざと大仰にしてその趣向をも楽しんでるかのようである。

続く二首は、祭のかへさ（斎院への帰還）の見物の際に、「たづみ」の車を止めるのにこちらの車の「どう<sup>⑥</sup>（轂）」を貸して、轆<sup>ながえ</sup>をかけさせた時の贈答である。

かへさに、とのたづみ<sup>⑥</sup>の、どうをかりてながえをか  
けたまへりし、「こと人にはさらにとらせねども」とて、  
いひやりし

こと人はゆるさざらましゆふだすきかくる車のながえなりと  
も（一一〇）

まさみちの少将などのり給へりし、それやよみけむ  
夕だすきかくる車のながえこそけふのあふひのしるしとはみ  
れ（一一一）

「たづみ」は道長の息男頼通で、幼名で呼んでいるからには、頼通が生まれた正暦三年（九九二）以降、頼通元服の長保五年（一〇〇三）二月二十日以前、つまり長保四年四月までの祭と推定できる。

「殿」は時の為政者道長を呼んだものだろう。和泉式部集において道長を指す場合、「大との」（二二五）、「入道殿」（四六三、六一四、続三三）があるが、和泉式部が彰子に出仕する

のは少し後の寛弘六年（二〇〇九）頃かとされ、出仕前であり頼通元服前の時期であれば「殿」で不都合はないだろう。

「まさみちの少将」は、源雅通（生年未詳）一〇一七）で、権左少弁時通男、のち祖父の左大臣雅信の養子となった。長徳四年（九九八）右近衛将監、長保元年（九九九）九月十三日「左兵衛佐雅通」（『小右記』）と見え、長保三年四月二十日、賀茂祭の右近衛府使をつとめた『権記』の記事「右近少将源朝臣雅通」が、最も早い少将の記録のようである。寛弘八年（二〇一一）十一月十六日にも「木工頭右少将雅通」（『権記』）と見え、翌長和元年（二〇一二）五月六日には「権中将雅通」（『小右記』）と見えるので、長保元年九月よりは後で長保三年四月までに少将に任ぜられ、寛弘八年末頃まで任に任じていたらしい。

雅通との贈答は、ほかに、

まさみちの少将、あり明の月をみておほしいづるなるべし

ねがめしてひとり有明の月みればむかしみなれし人ぞ恋しき

（二五四）

かへし

ねられねど八重むぐらせるまきのとにおしあけがたの月をだにみず（二五五）

があつて二人の交渉がうかがえ、『和泉式部日記』で恋人の一人と噂される「源少将」も雅通のことかとされている。

一一〇番歌、轅を貸しながら「ほかの人なら許さなかつたでしょう、たとえ木綿襷をかけた神聖な車の轅だったとしても」と詠みやったのに対して、「木綿襷をかけた神聖な車の轅であるからこそ、今日の葵（逢ふ日）のしるしと思ひます」（一一一）と恋歌のように返してきた、これは同乗していた雅通の少将が詠んだのかしらねと推測の体をとっているのは、このような二人の関係を前提にして、わざとぼかしているのだろう。<sup>(7)</sup>

### 三 「蔵人の少将」

一〇七番歌詞書「くら人の少将」について、『全釈』は、

公信の少将への注記と見る。と言ふのは、N110の歌からN108

—N111の歌が、藤原頼通元服（長保五年二月）前と推定されるのだが、長保元年四月—四年四月間において、蔵人の少将

と呼ばれ得るのは、公信のみだからである（『職事補任』）。

と、「公信の少将」の注記が本文化したと見ており、現在ではこれが通説となっている。<sup>(8)</sup>しかし、公信の任少将を条件とするなら

長保元年九月以降で、今一度検証が必要である。

また、名を注記する場合、たとえば「蔵人の少将<sub>公信</sub>」のよう

に書くのが普通であろうと思われる、「公信の少将」と名前が明示されているのに、わざわざ「藏人の少将」と注記するのは不審である。さらに、公信が「藏人の少将」であったのは一年ほどであり、後掲のようにその前にも後にも別の「藏人の少将」がいた。したがって「藏人の少将」は公信の代名詞となるほどの呼称でもない。そこで、本文通り「公信の少将」「藏人の少将」の二人と見る解の可能性を考えてみたい。

まず、公信が少将であった時期の「藏人の少将」が本当に公信のみであるか、確認しておく。

『職事補任』等により、「藏人の少将」すなわち五位藏人で少将を兼任した人物を一覧にすると、次のようである。念のため前後の期間も掲げている。

源 明理	永祚二 990年 9月1日	正暦六 995年 正月7日
藤原登朝	正暦三 992年 8月28日	正暦五 994年 10月
藤原重家	長保元 999年 正月10日	長保二 1000年 正月7日
藤原公信	長保四 1002年 2月30日	長保五 1003年 正月7日
藤原経通	長保五 1003年 正月8日	寛弘四 1007年 正月7日
源 雅通	寛弘二 1005年 正月10日	寛弘三 1006年 3月4日
藤原道雅	寛弘五 1008年 2月5日	寛弘六 1009年 2月7日

このうち、「公信の少将」の時期（長保元年九月～寛弘元年二

月）と重なる「藏人の少将」は、藤原重家、公信、経通である。また、一一〇番歌詞書により、「たづ君」の時期の祭（正暦三年～長保四年四月）であれば、「藏人の少将」は、源明理、藤原登朝、重家、公信の四人で、藤原重家も条件に適用のである。

藤原重家（九七七～没年未詳）は、左大臣顕光の男、母は村上天皇皇女盛子内親王で、後には「光少将」とも称された（『今鏡』等）。右にあげたように長保元年一月十日左近少将正五位下で五位藏人に補され、「藏人少将重家」の呼称も確認できる（『小右記』長保元年十月十八日、十一月八日）。ところが長保三年二月四日、藤原道長の養子となった右近衛権中将源成信とともに、三井寺で突然出家して世間に衝撃を与えた。時に重家二十五歳。この時の公任の歌が拾遺集・哀傷・一三三五に載り、行成の『権記』にも詳しく経緯が記されている。

以上のように、公信以外の「藏人の少将」を考える場合は、藤原重家が有力候補である。もしそうであれば、茶目つ気のある公信と、美男として名高い同い年の重家の二人が、和泉式部の噂を流したことになる。

ただ『公卿補任』によれば公信の任右少将は長保元年九月であるから、重家が「藏人の少将」であった長保元年四月の祭の時点では少将ではない。それゆえ「藏人の少将」注記説が覆されな

かつたのだろう。しかし見方を変えて、件の詞書は公信が少将になった後に書かれたと考えてみてはどうか。たとえば長保元年十月であれば、公信と重家の二人はまさしく「公信の少将、藏人の少将」と呼ばれることになるのである。

一一一番歌詞書の「雅通の少将」についても、長保元年四月の時点ではまだ少将ではないが、ここは推測で書いた部分でもあり、雅通が少将になった後に書いた可能性も考えられるだろう。

なお、一〇七―一〇九番歌は統集と重出するが、詞書が異なり、一〇八番歌に相当する歌がない。

稲荷祭みる女車のありけるを、「その人なめり」と或君達のいひけるをきよて、祭みる車の前より、おとこのすぐるほどに、ゆふにつけてさしつれ<sup>(マ)</sup>

いなりにもいはるときしなき事を今日ぞたゞすのかみにまかする(統三七三)

返しに、いみじうあらがひたれば

かみかけてきみはあらがふ誰かさはよるべにたまるみづにい

ひけん(統三七四)

すでに指摘されているように<sup>(10)</sup>、固有名詞や官職などを明瞭に示し事実性を志向する一〇七―一〇九番歌に対して、こちらは臆化した表現がとられ、相手の歌は採らない方針が見てとれる。詞

書末尾の「さしつれ」など本文に乱れがあるようでわかりにくい。が、正集によって補完すれば、稲荷祭見物の女車(で粽を取り込んだ車)があったが、「或君達」が自分だと言っているのを聞いた、賀茂祭見物の時に車の前をその男が通ったので、木綿につけて贈った、というのであろう。

しかし統集単独で読むならば、「その人なめり」は、たとえば誰か男性と同車していたのを見咎められたというふうにも解釈できる。「或君達」「おとこ」とあり、統集では相手は一人とも解せるが、正集とは違う詠歌事情を伝えている、あるいは原資料が異なるとも考えられる。統集の詞書をもって正集のほうも公信一人とする根拠にはならないであろう。

#### 四 おわりに

『和泉式部集』は、清水文雄氏の提唱による、正統あわせてAからJの十の歌群に分けて考えるのが一般的である<sup>(11)</sup>。いま問題にしている一〇七番歌から一一一番歌はB歌群に属し、百首歌(A歌群)に続く、物語的冒頭文「いづれの宮にかおはしけむ」(九八詞書)を持つことでも注目されてきた。

B歌群については、明らかに他資料や後人によるものがある一方で、和泉式部自身の歌反故の存在を思わせるものがあるとき

れ、「宮（敦道親王）」、「左衛門の督（公任）」、「公信の少将」「雅通の少将」等の人名表記は、事実性を志向するもので、殊に、宮公任等との交渉そのものを復元しようとする意識が強く、「式部の青春の社交場裡の記念碑」<sup>(13)</sup>とも言われてきたが、加えて、貴顕との交渉を喧伝しようとする意識も読み取れるだろう。

家集の冒頭部には、貴顕とのやりとりが置かれることが多い。たとえば『元輔集』は村上天皇代の紅葉合というハレの場で詠んだ歌から始まり、梨壺での女官とのエピソードが続く。『兼盛集』は円融院子日紫野行幸に際して兼盛が奉った和歌序と猷歌から始まる。『重之集』は名筆家藤原佐理の手本染筆のために詠んだ歌群から始まる。いずれも貴顕とのかかわりや、晴れがましい場での詠歌を家集冒頭部に置いている。

左衛門督藤原公任をはじめとする当代の貴公子の名を連ねるB歌群冒頭部の場合も、藏人少将の名を、公信少将の名とともに記そうとする意識が働いているのではないだろうか。重家であれば、和泉式部を前にちよつとからかつてはしゃいでいる公信と重家の姿が浮かび上がってくる。

先に述べたように、公信少将と藏人少将重家の二人であるなら、重家が藏人であった長保元年の祭のときには公信は少将ではなく、その意味では歴史的事実とは齟齬があるが、だからといって

公信の注記と決めてかかる必要はない。和泉式部自身が少し後にあって書いたとすればむしろ自然で、逆にごくわずかの期間しか存在しない「藏人の少将」という呼称が使えるのは本人でしかないという見方もできる。和泉式部集本文に忠実に読むならば、二人と読むべきであり、読むことができると思うのである。

以上、『和泉式部集』一〇七番歌詞書の「藏人の少将」は「公信の少将」の注記であったと見る通説のままではすわりが悪いので、後に思い出して書いたという視点を導入すれば、本文の現状のままに「公信の少将」「藏人の少将」の二人と理解できるのではないかという試解を提示してみた。

#### 注

- (1) 和泉式部集の引用は『榊原本私家集<sup>(1)</sup>』（日本古典文学影印叢刊9、貴重本刊行会、一九七八年）により、適宜濁点・句読点・鍵括弧等を付した。なお最小限の校訂を施したが、その場合は底本の本文を右傍に示した。
- (2) 引用は天理図書館蔵村田春海本の紙焼写真により、濁点・句読点を付して示した。岸本由豆流本は「岸本由豆流版下本和泉式部家集考証」（新典社、一九七七年）による。
- (3) 小松登美氏・村上治氏・佐伯梅友氏編著『和泉式部集全釈』（東宝書房、一九五九年／新装版『和泉式部集全釈 正集篇』笠間書院、二〇〇二年）。引用は新装版による。
- (4) 『公卿補任』では寛弘七年（一〇一〇）任左中将の記事しかない。



- なお検索には東京大学史料編纂所データベース、槇野廣造氏『平安人名辞典 長保二年』（高科書店、一九九三年）、古代学協会編『平安時代史事典』（角川書店、一九九四年／CD-ROM版二〇〇六年）等を参照した。
- (5) 「かむな月」は、ここでは「神の月」の意か。『全釈』は「みこもりの神さまもお留守の神無月」とするが如何。
- (6) 「かへさに、とのたづきみ」は底本「かつさことのたへきみ」とあるが『全釈』に従う。なお「たづきみ」は藤岡忠美氏（13）の論文以来の説。「たづ」の呼称は、『権記』長徳四年十一月十九日、七歳で童殿上を聴された記事（鶴君〔田ツ※割注〕）、『御堂関白記』長保元年七月二十七日、八歳で清水寺に参詣した記事（田鶴丸）などに見える。
- (7) 積極的に虚構と見る立場もある（藤川晶子氏「『和泉式部集』B歌群の成立と性格」『王朝文学の本質と変容 韻文編』和泉書院、二〇〇一年など）が、和泉式部本人の筆であつてもよい。
- (8) 清水文雄氏校注の岩波文庫『和泉式部歌集』（一九五六年）は「源雅通か」としてしたが、改版された『和泉式部集 和泉式部統集』（岩波文庫、一九八三年）には「公信の少将」の注記と見る和泉式部集全釈の説に従う」とあり、『全釈』以降は反論がないようである。
- (9) 『御堂関白記』『小右記』による。『職事補任』は長保五年正月十六日とする。
- (10) 平田喜信氏『和泉式部集の一考察―集内の重出現象をめぐって―』（『和歌文学研究』二三号、一九六八年六月）『平安中期和歌考論』新典社、一九九三年）、久保木寿子氏「和泉式部正集の形成に関する考察」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第八集、一九八一年三月）等。
- (11) 清水文雄氏「和泉式部正集の成立」（『国文学』一九三四年一月）、「和泉式部統集に収録されたいはゆる『帥宮挽歌群』について」（『国語と国文学』一九六四年五月）等。（8）の岩波文庫や『校訂本 和泉式部集（正・続）』（笠間書院、一九八一年）等にも示されている。
- (12) 久保木氏前掲論文。
- (13) 藤岡忠美氏「和泉式部集の成立」（『国語と国文学』一九五一年五月号）『平安和歌史論―三代集時代の基調―』桜楓社、一九六六年）

（あおき しづこ・本学教授）